

1 布引の滝のしらいとなつくれは
絶えすそ人の山ちたつぬる

藤原定家

【解説板】

藤原定家（農保二（1162）～仁治二（1241））、俊成の子、新古時代を代表する歌人であり余情豊かな格調のたかい歌を詠んだ。新古今集・新勅撰集の撰者であり、小倉百人一首も彼の撰に基づいている。

この歌は後鳥羽院が関東調伏のために京都白川辺に建てられた寺の最勝四天王院の障子を飾った歌である。最勝四天王院障子和歌という。全国四十六の和歌を人々に詠ませられたが、その時定家が詠進した布引の滝の歌である。

歌意は平明である。

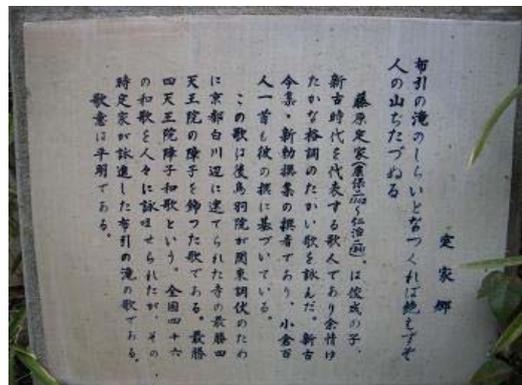
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



2 あしのやの砂子の山のみなかみを のほりて見れば布ひきのたき

藤原基家

【解説板】

この歌は夫木和歌抄にあるもので、作者は後九條内大臣となっている。即ち藤原基家（建仁三（1203）～弘安三（1280））である。この碑に刻まれている兼実（久安五（1149）～承元元（1207））の孫にあたり、続古今集の撰者に加わって活躍した人である。

伊勢物語八十七段の「いさこの山の上にあるという布引の滝見にのぼらむ」の所を「いざ、この山」とよまないで「いさごの山」とよむ説の根拠にされている歌である。

一方、伊勢物語のこのよみ方からこの山の名ができたとの説もある。

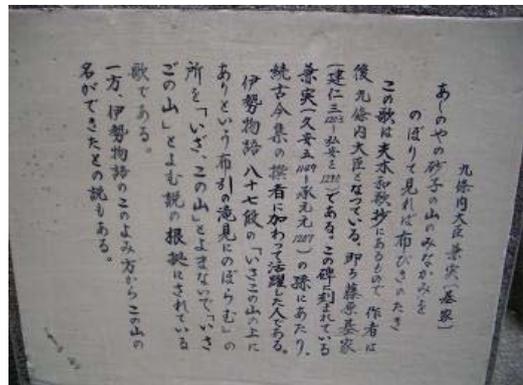
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



3 布引の滝の白糸わくらはに 訪ひ来る人も幾代経ぬらむ

藤原行能

【解説板】

藤原行能^{ゆきよし}（治承四（1180）～没年未詳）、
鎌倉期歌人。

父は世尊寺流の書家伊経で、行能も
また同流の能書家として有名で新勅撰
集の奏覧本を清書するほか諸所の額や
屏風の揮毫にあたった。新古今集以下
勅撰集に四十九首入集する。

この歌は新勅撰集にあるが、元は建
保三年（1215）順徳院の命で撰進され
た名所百首歌である。「滝の白糸」は、
白く流れ落ちる滝水を幾筋もの白糸に
見たてた歌語であり、「わくらは」は、
たまさかにの意。たまに訪ねくる人も
どの位年代を経たものであろうかと、
布引の滝の長年月人々から愛され観賞
されたことを詠んでいるのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



4 津の国の生田の川の水上是 今こそ見つれ布引の滝

藤原基隆

【解説板】

藤原基隆^{もとたか}（生没年未詳）、鎌倉期歌人。

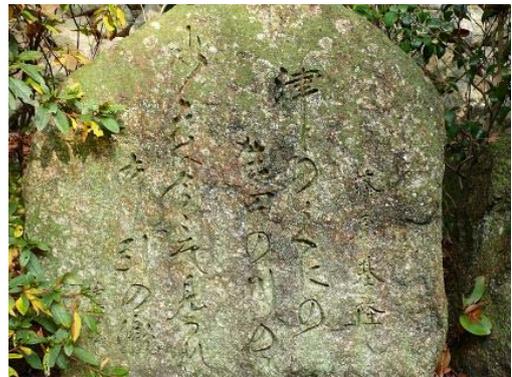
藤原基綱の子で六波羅評定衆（鎌倉幕府の職名で京都六波羅で訴訟を司った役人）であった。歌は続古今集以下勅撰集に八首入集する。

この歌は新続古今集に「布引滝を」の題で入っている。生田川は明治期までは加納町三丁目三角地帯の「史跡生田川址」の記念碑が示すように、布引から加納町を経て南下する幹線道路がその川筋で、その水上に「今こそ見つれ」と新しく接した感慨が感じられるのである。単純な表現が却って実感味を帯びている。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



5 水の色たた白雪と見ゆるかな たれ晒しけむ布引のたき

源 顕房

【解説板】

源 顕房^{あきふさ}（長暦元（1037）～嘉保元（1094））、平安朝歌人。

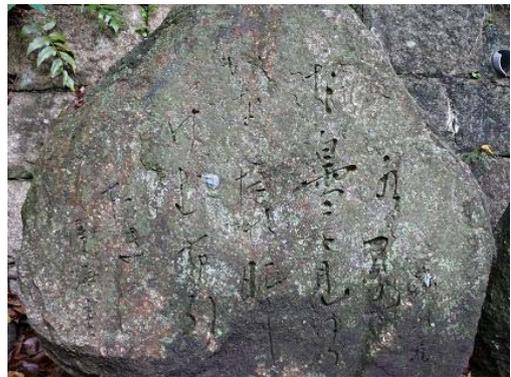
土御門右大臣師房の子で、彼もまた右大臣で六条右大臣と号した。後拾遺集以下に十四首入集する。この歌は栄花物語にあるもので、承保三年（1076）の頃、時の関白師実が布引の滝を遊覧した際従った顕房の詠んだ歌、滝水の真白さを白雪にたとえている。千載集では白雲とあるが、晒すは水で洗ったり干したりして白くすることで、やはり白雪がよい。この様に白く美しくするのは誰がしたのであろう、人間わざではあるまいとの心情が出ている。

なお関白師実の歌は歌碑「さらしけむ」の歌である。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



6 音にのみ聞きしはことの数ならて 名よりも高き布引の滝

藤原良清

【解説板】

藤原良清（生没年未詳）、平安期歌人。

勅撰作者部類によれば右馬頭藤原範綱の子で、太皇太后宮少進（太皇太后宮に関する役所の三等官）である。千載集に三首の歌をのこす。

この歌も千載集にあるもので「布引の滝をよめる」との題がある。音の縁で琴をひびかせ、同時に事の数と数多いことを示し、布引の滝はたいへん名高いがその数多い名でなくて、即ちその高名さよりなお滝が高いとその雄大さを言っている。伊勢物語では「長さ二十丈広さ五丈程の岩の面を白絹で包んだ様」とあるが、雄雌と分離されず一本で長年月の変化が思われる。

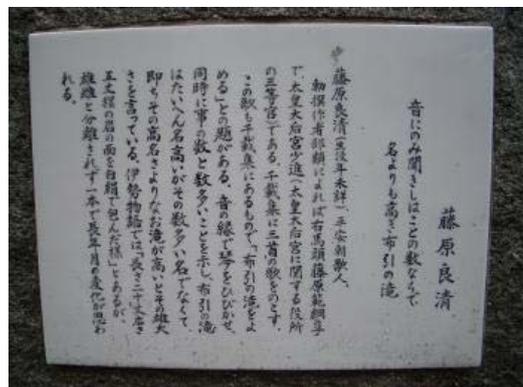
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



7 さらしけむ甲斐もあるかな山姫の たつねて来つる布引の滝

藤原師実

【解説板】

碑には藤原忠通（承德元（1097）～長寛二（1164））となっているが栄花物語によれば、承保三年（1076）、時の関白藤原師実（長久三（1042）～康和三（1101））が布引の遊覧の際詠んだ歌となっている。師実は頼道の子、関白大政大臣となり白河上皇の院政をたすけた。歌を好みしばしば歌会を催した。

この歌は、滝の水の落下する様子を、白布をさらすのにたとえ、「来つる」に「着つる」をかけている。山姫は山の女神である。

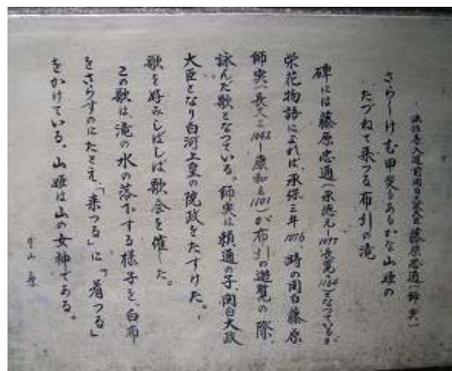
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



8 山人の衣なるらし白妙の 月に晒せる布引のたき

藤原良経

【解説板】

藤原良経（嘉応元（1169）～元久三（1206））平安末鎌倉期歌人。

父は関白藤原兼実で、良経もまた太政大臣になった。歌人としても重要な存在で、歌壇活動を活発にした。後鳥羽院の信任厚く、和歌所の寄人筆頭となり、新古今撰進に大いに貢献した。

この歌は続古今集にもあるが、彼の歌集「秋篠月清集」によれば、建仁元年（1201）後鳥羽院などと共に詠んだ「院句題五十首」の作で月照清水という題である。月光を浴びて滝水が真白に晒される風情で、人間界のものでなく、まさに山人即ち仙人の衣であるよくだとの趣向である。

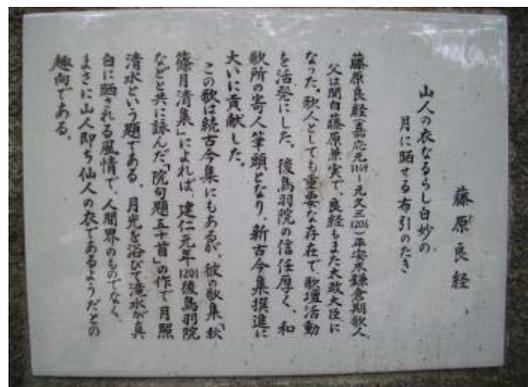
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



9 山姫の嶺の梢にひきかけて

晒せる布や滝の白波

源 俊頼

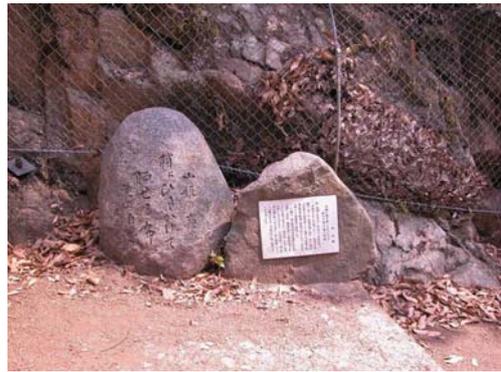
【解説板】

源 俊頼としより（天喜三（1055）～大治四（1129））、平安期歌人。

源経信の子で木工頭であった。父経信の影響下に早くより作歌活動を始め、やがて歌合の判者など指導者として活躍した。清新な歌風の持主で歌壇に新風を吹きこんだ。白河院の命により金葉集を撰進した。

この歌は、彼の歌集「散木奇歌集」によれば「布引滝」であるが、続古今集では「布引滝見にまかりて」との題であるので、実地詠となる。人間の手によるものでなく、この滝水は、山の女神が嶺の梢にひきかけて、山の斜面にさらした白布であるよ、との布引の名を如実に示しているのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



10 幾世とも知られぬものは白雲の 上より落つる布引の滝

藤原家隆

【解説板】

藤原家隆（保元三（1158）～嘉禎三（1237））、平安末鎌倉期歌人

中納言光隆の子で宮内卿であったが、歌壇に活躍、新古今集撰者となり、藤原定家と並び称せられる新古今時代の代表歌人である。

多作家で詠歌六万首あったと伝えられる。後鳥羽院を慕い、院隠岐配流後も忠誠をつくしたのには有名である。この歌は新後撰集にあるが、千五百番歌合における勝歌で判者慈円は、

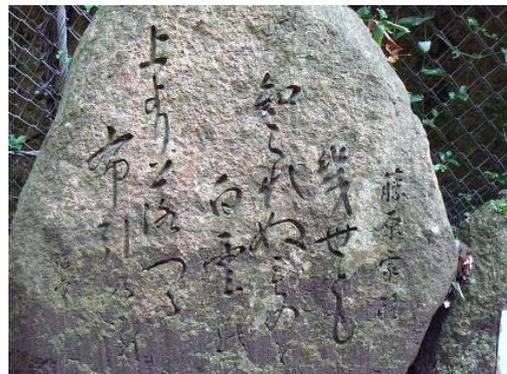
いとどしく 音さへ高く 聞ゆなり
雲にさらせる 布引の滝

との判の歌でもって讃えている。布引滝の壮大性と永続性がみられる。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



11 いかなれや雲間も見えぬ五月雨に
さらし添らむ布引の滝

藤原俊成

【解説板】

藤原俊成（永久二（1114）～元久元（1204））官職は皇太后宮大夫となったが出家して釈阿と号した。九十一歳の長寿を保ったが千載集撰進以後は、鎌倉期にかけて歌壇の長老として後進を指導した。

幽玄美を理想としたが、それがやがて余情余韻ゆたかな新古今歌風を生み出す母胎となった。

この歌は治承二年（1178）五月右大臣家百首に「五月雨」の題で詠まれたものである。なお、この歌碑の文字は明治期、禅宗の老師であった南天棒禅師の筆になるものである。

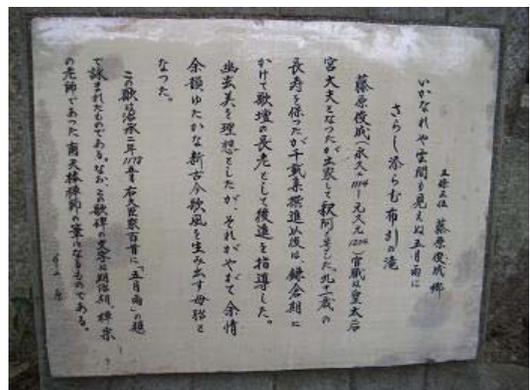
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



12 岩はしるおとは氷にとさかれて

松風おつる布引のたき

寂蓮法師

【解説板】

寂蓮（生年不詳～建仁二(1202)）本名は藤原定長で俊成の養子となったが出家して寂蓮と号した。諸国に旅すると共に諸歌会に出詠するなど歌壇で活躍した。新古今集の撰者にも加わったが、その成立を見ずして没した。

この歌は玄玉集によれば「百首歌に氷閉滝水といふ心を」という題の歌となっている。

氷にとざされた滝水に松風を配してたくみに表現している。玄玉集は建久二年(1191)頃に成った私撰歌集である。

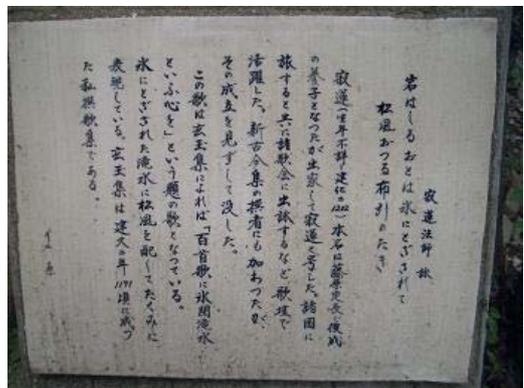
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



13 白雲とよそに見つれと足曳の 山もととろに落つる滝津瀬

源 経信

【解説板】

源 経信（長和五(1016)～永長二(1097)、平安朝歌人。

民部卿通方の子で権大納言であったが、晩年大宰権師となり任地で逝去。詩歌管絃にすぐれ、平安後期初頭歌壇の重要な存在で、客観描写（例えば小倉百人一首の「夕されば」の歌は彼の歌である）の清新な歌風を示した。

この歌は、金葉集では第二句の中「見つれば」とあるが、経信集では「於布曳滝前述懐」の題で「見つれど」となっている。足曳は山の枕詞。白雲だと遠目に無関心に見ていたが、近づいてくると、思いもかけず山を鳴りひびかせて落ちる滝だったよと、視覚から聴覚への詠嘆である。

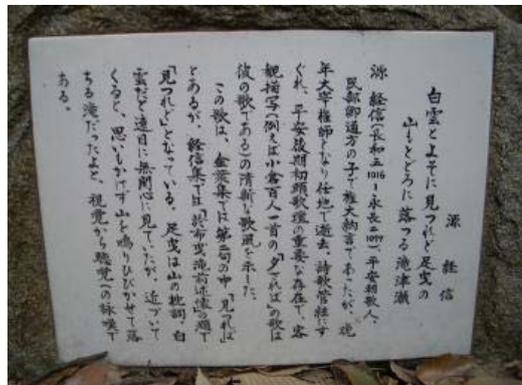
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



14 水上の空に見ゆれば白雲の 立つにまかへる布引の滝

藤原師通

【解説板】

藤原帥通（唐平五（1062）～唐和元（1099））、平安朝歌人。

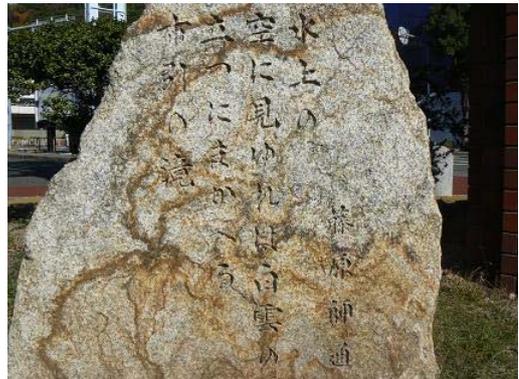
関白帥実の子で、彼もまた内大臣関白であった。多才多芸の持主と伝えられる。日記に二条関白記があり後拾遺集以下に五首入集する。

この歌は新古今集に「京極前太政大臣布引の滝見にまかり侍りけるに、二条関白内大臣」とあるが、即ち栄花物語にある帥実遊覧の際、父に従って来たのである。栄花物語では三位中将の肩書きである。新古今では第二句「空に見ゆるは」とあるが見えるからとする栄花の方が明直であろう。高所に見える事については宝永七年（1710）の兵庫名所記に滝が海辺から見える記事がある。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



15 呉竹の夜の間に雨の洗ひほして

朝日に晒す布引の滝

西園寺実氏

【解説板】

西園寺実氏（建久五(1194)～文永六(1269))、鎌倉期歌人。

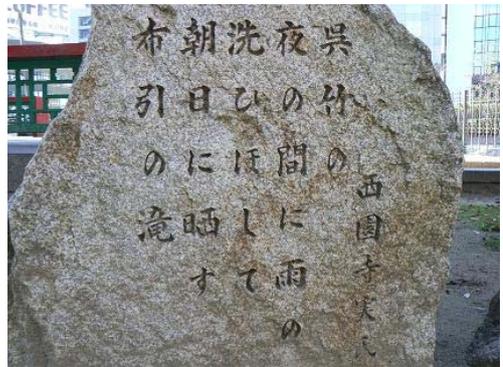
太政大臣公経の子で、自分も内大臣を経て太政大臣になった。皇室の外戚となり、特に後嵯峨院時代に大いに勢力をもった。歌道においては藤原為家と親しくして歌壇活動をした。新勅撰以下に二百三十六首入集する。

この歌は夫木和歌抄にあるが、「呉竹の」は竹の節から転じて夜・世などにかかる枕詞である。夜中の雨に洗い干して、更に朝日の光にあてて真白になりゆく布とつづけているのである。布引の滝の純白清新な風趣である。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



16 　　うちはへて晒す日もなし布引の
　　滝の白糸さみたれの頃

藤原為忠

【解説板】

藤原為忠（延慶二（1309）～応安六（1373））南北朝歌人。

二条為藤の子で中納言であった。若い頃から歌道に精通し、二条家歌人として名を成した。正平年間南朝に出仕し、南朝歌壇における重要な歌人である。宗良親王撰になる准勅撰集の新葉集には四十首入集している。

この歌も新葉集にあり、正平八年（1352）の内裏千首歌会のもの、題は滝五月雨とある。暗雲たれこめ五月雨降りつづく連日、滝水もうす暗く、白く輝く風情ではない。それを滝の白糸を長く延ばして晒す日もないと表現したのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



17 水上は霧たちこめて見えねとも

音そ空なる布引のたき

高階為家

【解説板】

高階為家（生没年未詳）、平安朝歌人。

太宰大貳高階成章の子で、栄花物語の承保三年(1076)頃の記事の肩書では播磨守とある。特に名のある歌人ではなく勅撰集には歌は見あたらない。

この歌も栄花物語の関白帥実布引の滝遊覧の時のものである。たちこめた霧のなか、空高く鳴りひびく滝音の風情である。布引の滝の高さに触れたのは、この歌碑群の中にもよく見られるところである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



18 水上はいつこなるらむ白雲の 中より落つる布引の滝

藤原輔親

【解説板】

藤原輔親すけちか（天歴八年(954)～長暦二年(1038)）、平安朝歌人。

家系は大中臣氏おおなかとみで伊勢神宮に奉仕する祭主よしのぶ（神宮の長）の家柄である。その祭主能宣の子で、彼もまた祭主となり、且つ神祇官の長官である神祇伯にもなった。

また、大中臣家は代々歌人の家であり、彼もまたその血をうけて種々活躍した。拾遺集以下勅撰集に三十一首入集する。

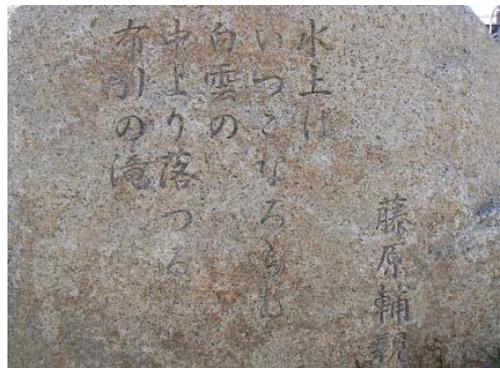
この歌は輔親家集には見あたらないで、続古今集にあるもので、「布引滝を」との題である。

この歌も布引の滝の高く壮大なことを讃えた歌で、歌意は平明である。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



19 岩間より落ち来る滝の白糸は

むすはて見るも涼しかりけり

藤原盛方

【解説板】

藤原盛方^{もりかた}（保延三年(1137)～治承二年(1178)）、平安朝歌人。

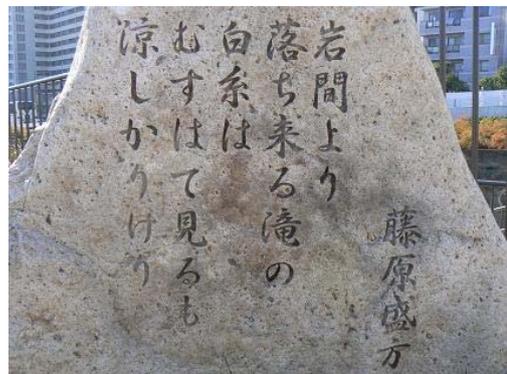
中納言^{あきとき}顕時^{ただもり}の子で、母は平忠盛の女であるから平清盛^{きよもり}とは従兄弟になる。広田神社社頭で開催の広田社歌合にも出詠している。千載集以下勅撰集に九首入集する。

この歌は千載集にあるもので藤原頼^{より}輔^{すけ}の家の歌合で詠んだもの、「納涼の心」をとの題である。だから「涼しかりけり」といっているのである。「むすばで」は「酌まないで」の意だが糸の縁語にもなっている。手にとらないでも見るだけで涼しい気がする、と自然な情感をうたっている。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



20 松の音琴に調ふる山風は

滝の糸をやすけて弾くらむ

紀 貫之

【解説板】

紀 貫之（生年未詳～天慶八(945)）、平安朝歌人。

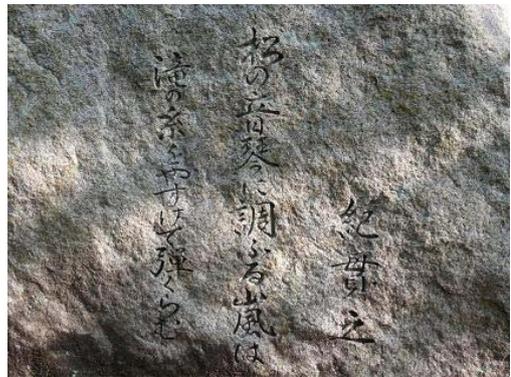
官吏としては木工権守が最後であったが、歌人としては最初の勅撰集、古今集撰進の第一人者であり、平安朝和歌の基礎を築くと共に、古今集序や土佐日記によって仮名文字の道を開いた。数多い屏風歌を詠んだのも特徴である。

この歌も屏風歌で、延喜十七年(917)敦慶親王（宇多皇子）家の屏風の（松山の）滝を画いた大和絵の画賛の歌である。松風が琴の音のようにひびいてくる、滝水の糸を張っての琴であろうよ、と松籟と滝音とが調和している風情を思いやって詠んでいるのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



21 たち縫はぬ紅葉の衣そめ出でて

何山姫のぬの引の滝

順徳院

【解説板】

順徳院（建久八（1197）～仁治三（1242））、父は後鳥羽院、第八十四代の天皇である。早くから和歌に親しみ歌学を研究された。

その著「八雲御抄」は古代歌学を知る上に重要な資料となっている。父と共に北条氏打倒を企てられたが、事ならず佐渡島に配流の身となられた。

この歌は建保三年（1215）の内裏名所百歌の中「布引の題」を題にしたものである。たちぬはぬ衣は無縫の天衣であり、山姫は山の女神を意味する。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



22 ぬきみたる人こそあるらし白たまの
まなくもちるかそでの狭きに

在原業平

【解説板】

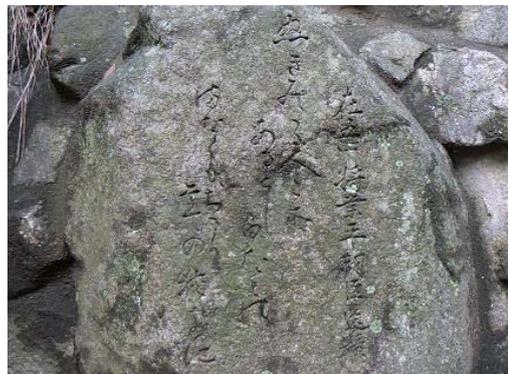
在原業平（天長二（825）～元慶四（880））、平城天皇皇子の阿保親王の第五子で在五中将とも呼ばれる。六歌仙時代の代表歌人であり情操ゆたかな歌を詠んだ。業平の歌を物語化したものが漸次増益して現在の伊勢物語になったとされている。

この歌も伊勢物語にあるもので、業平が父の領地芦屋の里にいた時、友人たちと布引の滝見物に来た時詠んだものである。滝の水玉がとび散るのを、緒で貫いた白玉をばらばらにして散らしたように見たてたもの。袖は白玉をうけとめる自分の衣の袖である。

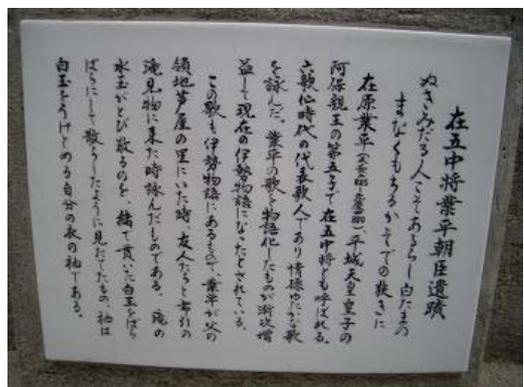
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



23 我世をは今日か明日かと待つ甲斐の 涙の滝といつれ高けむ

在原行平

【解説板】

在原行平（弘仁九（818）～寛平五（893））、平安朝歌人。

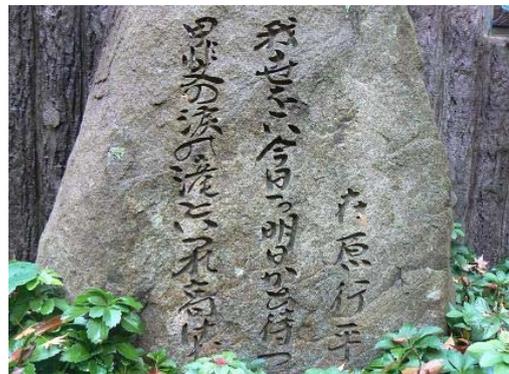
父は芦屋に塚のある阿保親王（平城皇子）で業平の兄である。因幡守や民部卿であったが須磨に隠棲の身となり、松風村雨との伝説は有名で、謡曲「松風」などの題材となっている。

この歌は新古今集にもあるが、元は伊勢物語で、業平一行と布引見物に来た時の歌である。自分の失意を表した歌で「世にときめくのを今日明日と待つ甲斐もなく不幸なわが身こぼれ落ちるわが涙の滝とこの滝とどちらが高いか、私の涙の方が・・・」との気持ちがちにじみ出ている。涙のなに甲斐の無がひびいている。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



23 別 こきちらすたきのしら玉拾ひおきて
世のうきときのなみたにそかる

在原行平

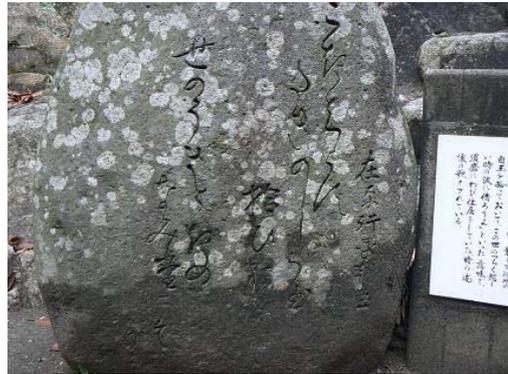
【解説板】

在原行平（弘仁九(818)～寛平五(893)）
平城天皇皇子の阿保親王の第二子
で、業平の兄である。文徳天皇の御代
に事情があって須磨にわび住居をして
いたことがある。その時松風村雨の姉
妹を愛した伝説は有名である。この古
今集にあるもので「布引の滝にてよめ
る」との題がついている。「しごいて散
らす滝水の白玉を拾っておいて、この
世のつらく悲しい時の涙に借ろうよ」
といった意味で、須磨にわび住居をし
ていた時の述懐の歌とされている。

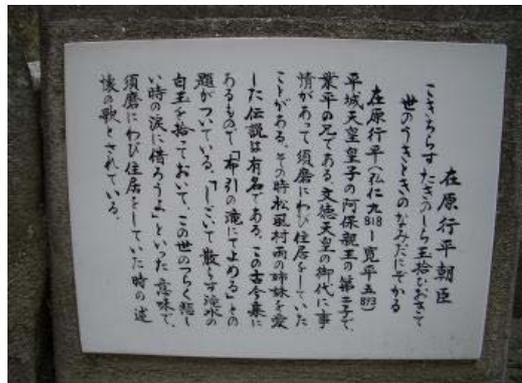
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



24 雲井よりつらぬきかくる白玉を たれ布引のたきといひけむ

藤原隆季

【解説板】

藤原隆季（大治二年(1127)～没年未詳）、平安朝歌人。

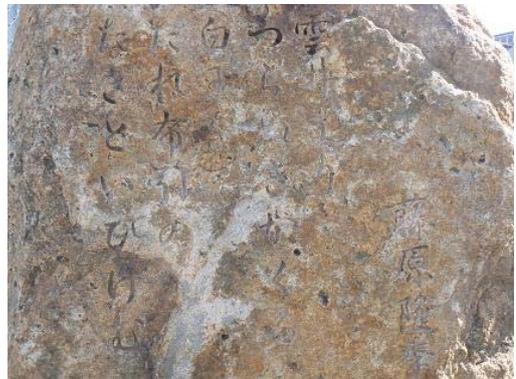
中納言家成の子、権大納言であった。詞花集以下の勅撰集に十一首入集する。

この歌は詞花集に、「左衛門督家成、布引の滝見にまかりて歌よみ侍けるによめる」との詞書のある歌である。即ち左衛門督であった父家成と共に、滝見物に来た時の歌である。滝水を白玉と呼ぶのは、業平の「白玉のまなくも散るか」・行平の「こきちらす滝の白玉」などにも見られる。この滝を布引の滝と誰が言ったのか、むしろ白玉の滝というべきではないかといった口吻がある。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



25 久かたの天津乙女の夏衣

雲井にさらす布引のたき

藤原有家

【解説板】

藤原有家（久寿二（1155）～建保四（1216））、従三位大蔵卿であった。

歌学系統では、俊成・定家の御子左家系統に対抗していた六條家系統に属するが、御子左家歌学とも融和して歌壇に活躍し新古今集撰者にも加えられた。

この歌は最勝四天王院障子和歌で定家と共に布引の滝をよんだものである。

滝を大空にさらす白布、即ち天女の夏衣と見たてた趣向のおもしろさがある。

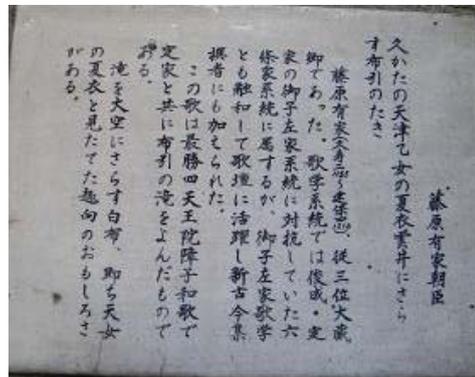
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



26 ぬのひきのたき見てけふの日は暮れぬ
 一夜やとかせみねのささ竹
 布引のたきつせかけて難波津や
 梅か香おくる春の浦風

澄覚法親王

【解説板】

ちょうかくほっしんのう

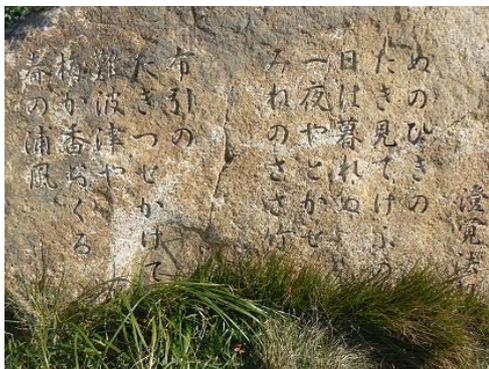
澄覚法親王（承久元年(1219)～正応二年(1289)）

後鳥羽院皇子の雅成親王の長子で、若くして出家、天台座主大僧正となる。家集に澄覚法親王集があるが、この二首は同集には見あたらず夫木和歌抄に「布引百首御歌」として掲載されている。終日布引をたのしんだ感慨と早春の滝の風情があらわれている。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



27 たち縫はぬ衣着し人もなきものを
なに山姫の衣晒すらむ

伊勢

【解説板】

伊勢（元慶始(877)～天慶始(940)頃）、藤原継蔭の娘で父が伊勢守であったことから伊勢と呼ばれた。朝廷に出仕し宇多天皇の寵をうけ皇子を生んだ。歌にすぐれ古今集時代の女流歌人を代表する人である。

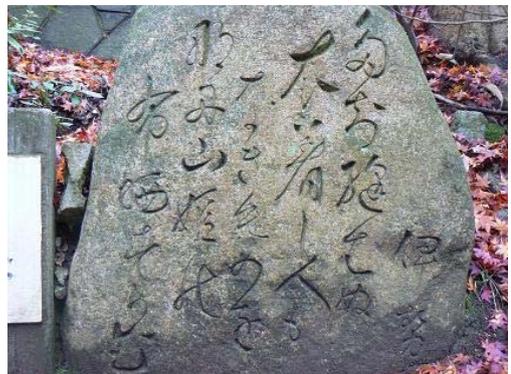
この歌は古今集にあるもので「龍門に詣でて滝のもとにてよめる」とあり、大和の龍門の滝をよんだものである。たちぬはぬ衣は無縫の天衣、即ち天人の衣である。

着し人は仙人、山姫は山の女神で、落下する滝の状態を白布をさらしているのにたとえたものである。

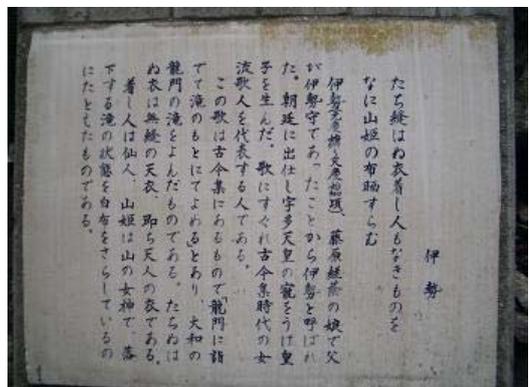
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



28 ぬしなくて晒せる布を棚はたに
我ころとやけふはかしまし

橘 長盛

【解説板】

橘 長盛（生没年不詳）、文章博士 橘直幹の父で従五位長門守であった人である。

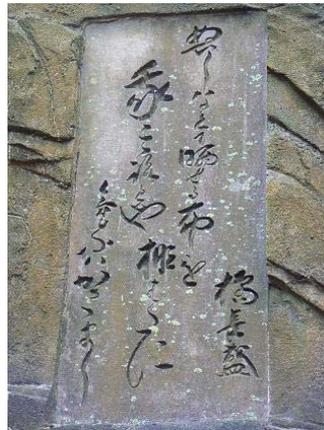
この歌古今集によれば宇多天皇が布引の滝遊覧のため七月七日に御幸あらせられて、お供の人々に歌を詠ませられた。その時長盛が詠進した歌となっている。

誰も持ち主なくて晒している白布（滝）を今日は七夕の日だから自分ひとりのはからいであの織女にかしてやろうといった意味でその日にふさわしく詠んだのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



29 雲かすみたてぬきにして山姫の 織りて晒せる布引のたき

加藤枝直

【解説板】

加藤枝直^{えなお}（元禄五年(1692)～天明五年(1785)）、江戸期歌人。

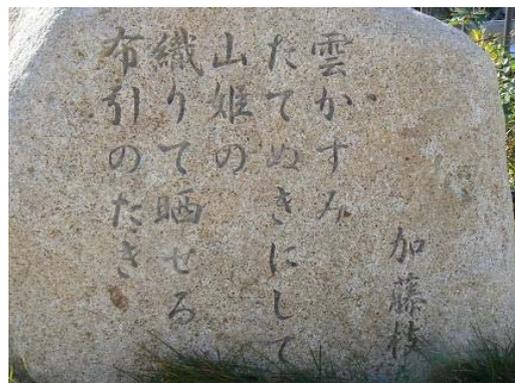
伊勢の人であるが、江戸に出て大岡越前守の配下の町与力^{かものまぶち}などの役人となった。和歌を好み賀茂真淵と親しみ門弟ともなり、その保護者でもあった。歌風は技巧をまじえた古今風であり、自撰歌集に「あづま歌」がある。

この歌、雲と霞とを経（たて糸）と緯（よこ糸）にして山の女神が織って晒したと、いかにも流麗な古今風表現である。その美しさはこれまた人工わざでないと言っているのである。校註国家大系本「あづま歌」では、三句「おもてさらせる」とあるが経緯故「織りて」の方があてはまる。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



30 主なしと誰かいひけむおりたちて きて見る人の布引のたき

小沢蘆庵

【解説板】

小沢蘆庵^{ろあん}（享保八年(1723)～享和元年(1801)）、江戸期歌人。

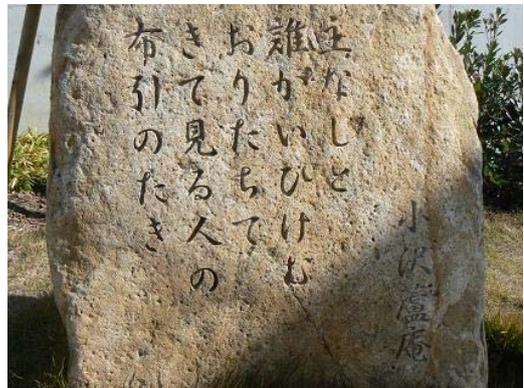
京都に住み、伝統歌学を排し自家の説「ただごと歌」を提唱して、平易な用語で感情をあるがままに表現することを説いた。歌集に「六帖詠草」、歌学書に「ふるの中道」がある。

この歌も六帖詠草にあり名所滝との題がある。「主なし」とは持ち主の無い意である。この歌碑群の中に橘長盛の「ぬしなくて」の歌があるが、これを本歌としたものであろう。即ちここにやって来て見る人こそ持ち主ではないかとの気持である。また織り裁ちて着てをもひびかせている。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



31 くりかえし見てこそ行かめ山姫の とる手ひまなき滝の白糸

鈴木重嶺

【解説板】

鈴木重嶺^{しげね}（文代二年(1814)～明治三十一年(1898)、江戸末 明治期歌人。

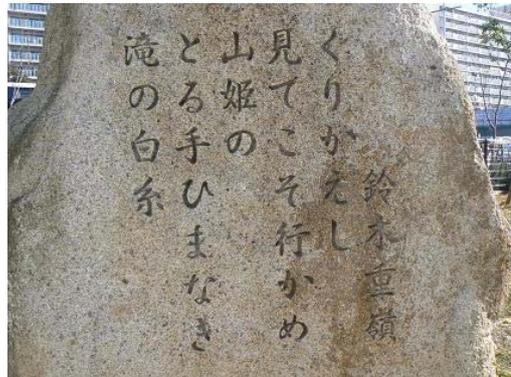
江戸幕府末期の役人で、維新頃の官職にもついた。後、歌道に精進し明治二十八年(1895)短歌結社「鶯蛙吟社」^{げいあぎんしゃ}を結成し、歌誌「詞林」^{しりん}を発行した。この「詞林」は後年「心の花」に吸収合併された。

この歌、「山の女神が手も休めずに白糸をくりかえし繰るようくり返し眺め楽しんで行こう」と繰る、糸の縁語をからませた技巧歌である。これまた布引の滝は人工美でなく、造化の女神の手になったとその美しさを讃えているのである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



32 布引の滝のたきつ瀬音にきく

山のいはほを今日見つるかも

賀茂真淵

【解説板】

かものまぶち

賀茂真淵（元禄十年(1697)～明和六年(1769)）江戸期 国学者・歌人

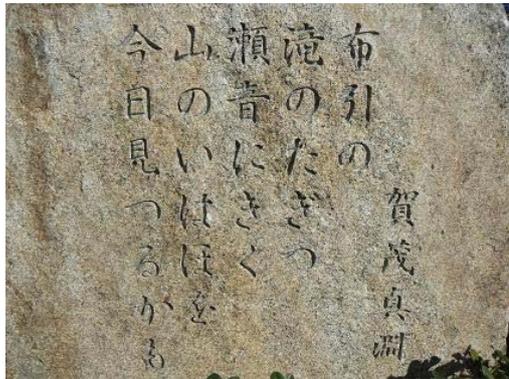
遠江の人、京都で荷田春満かだのあずままるに国学を学び江戸に出て古典研究につとめた。和歌においては古風を尊重、万葉調を重要視した。多くの門下生があり、もとおりのりなが むらたはるみ たちばなちかげ本居宣長・村田晴海・橘 千蔭など優れた学者が輩出した。その一門を屋号あがたい県居にちなみ県門と称した。

この歌は賀茂翁家集に「知人の家に布引の滝の岩の断片が置いてあるのを見て」といった詞書があるので歌意は明らかである。第三句滝音をひびかせて有名なとつづけている。結句など万葉調であろう。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



33 たち縫ぬ絹にしあれと旅人の まつきて見や布曳の滝

賀茂季鷹

【解説板】

賀茂季鷹（宝暦二（1752）～天保十二（1841））、本姓は山本、上賀茂神官であったが、和歌・狂歌に秀でていた。また国文学者としてもすぐれ伊勢物語傍註その他の注釈書がある。この歌の「縫ぬ」「見や」は「縫はぬ」「見るや」で送仮名を省略して刻まれており「きて」に「来て」と「着て」とを掛けことばにしている。

「たち縫はぬ衣」は仙人の衣で普通の人間ではきることはできないが、旅人がきてながめたのしむ神秘的な布引の滝よとたたえているのである。

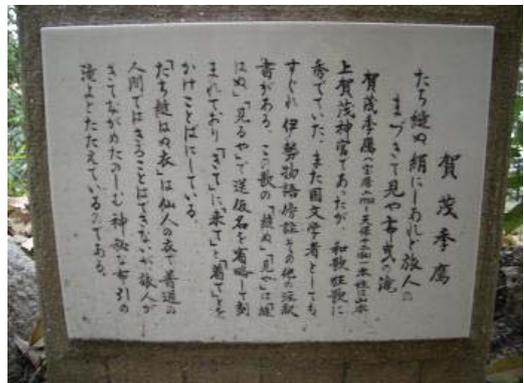
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



33 別 分入し生田の小野の柄もここに

くちしやはてむ布曳の滝

賀茂季鷹

【解説板】

賀茂季鷹（宝暦二(1752)～天保十二(1841))、本姓は山本、上賀茂神官であったが、和歌・狂歌に秀でていた。また国文学者としてもすぐれ伊勢物語傍註その他の注釈書がある。

この歌、生田の小野に斧をかける。斧の柄が朽ちるとは仙境に入り仙人の碁を見ているうちに手にした斧の柄が腐ってしまい村に帰ると知人たちは死んでいたという中国の王質の故事によったもので、布引の滝のすばらしさにくっきりとして時のたつのも忘れるといった趣をよんだものである。

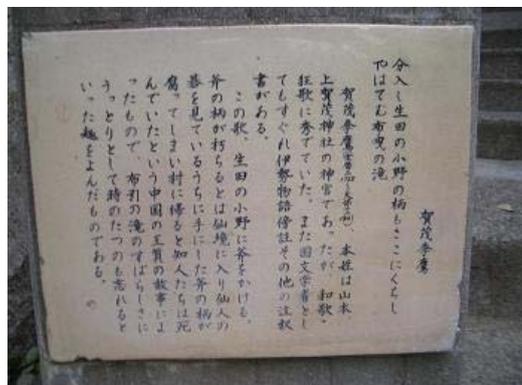
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



34 布引のたきのしらいとうちはへて
たれ山かせにかけてほすらむ
蛍とふあしやの浦のあまのたく
一夜もはれぬ五月雨のそら

後鳥羽院

【解説板】

後鳥羽院（治承四（1180）～延応元（1239））、第八十二代の天皇、歴代天皇の中で和歌に最も熱心な方であり新古今集撰集の業にはその第一線にたたれ撰者たちを指揮された。即ち新古今集は院の親撰である。

鎌倉幕府打倒の事成らず隠岐に配流の身となられたが、遠島においても専ら和歌に心をよせられ、王者の風格と気品にみられた詠草をのこされている。この二首共に最勝四天王院障子和歌で布引の滝と芦屋の里を題としたものである。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】



35 世と共にこや山姫の晒すなる

白玉われぬ布引のたき

藤原公実

【解説板】

藤原公実^{きんざね}（天喜元年(1053)～嘉承二年(1107)）、平安朝歌人。

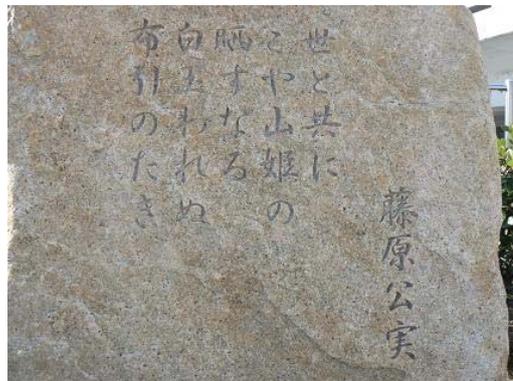
大納言実季^{さねすえ}の子で権大納言であった。和歌にすぐれ堀河朝の代表歌人とされている。後拾遺集以下の勅撰集に五十七首入集している。

この歌は例の栄花物語の関白師実布引遊覧の時の歌である。「世と共に」は世があると共にいつまでもとの意、「こや」はこれやで、これこそ山姫の晒す布とつづき、「白玉われぬ」は白玉のような水しぶきがとび散っている様で、この素晴らしい布引の滝の風景は山の女神の手になるものと、その神秘性を表している歌である。

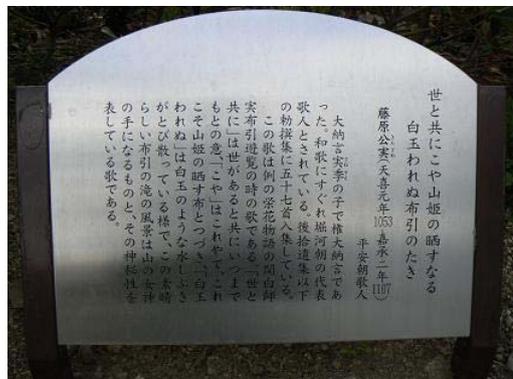
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



36 たちかへり生田の森の幾度も

見るとも飽かし布引の滝

源 雅実

【解説板】

源 雅実 (康平二年(1059)～大治二年(1127))、平安朝歌人。

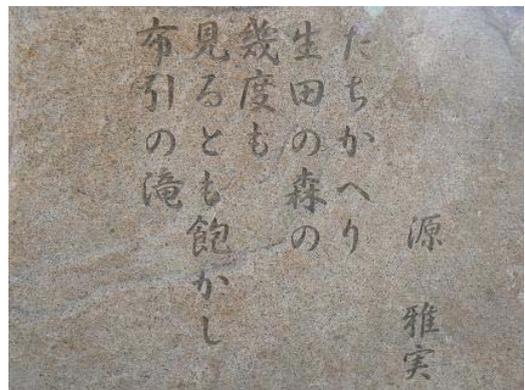
右大臣あきふさ顯房の子で太政大臣となった。久我こが氏の祖で久我太政大臣といわれる。金葉集以下に五首入集する。

この歌もまた栄花物語の歌。第一・二句は同音のくりかえしによって「いくたびも」へとつづく序詞である。生田の森は枕草子にも讃えられている神戸の名勝である。これによって布引の滝が神戸のそれであることが確認されるのである。いくら見ても飽くことのないわが布引の滝である。

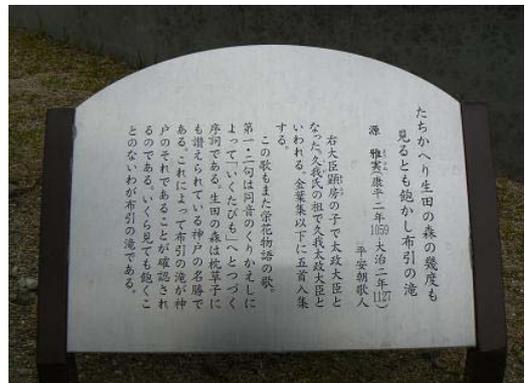
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



番外1 千代かけて雄たき女瀧の結ほれし
つきぬ流を布引の川

作者不詳

【解説板】

この歌碑は明治の始めの滝の名歌三十六歌に入っていない。このちかくに住んでいたひとが自分の歌を刻んだものとおもわれる。

歌意は平明である。

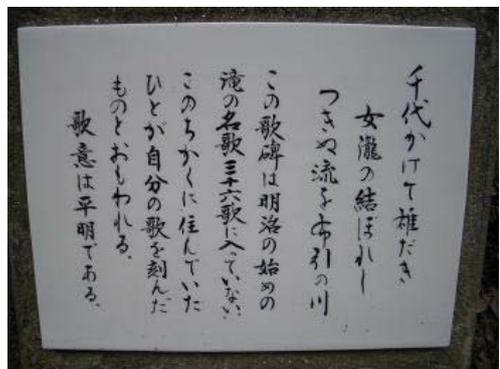
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



番外2 みそ六つのひに響けり山姫の
織るや妙なる布引のたき

太田錦里

【解説板】

布引三十六歌碑復興提唱者 太田錦里
詠

昭和十二年四月布引保勝会の人たちによって建てられた歌碑である。歌及び書は太田錦里氏のものである。

「みそ六つのひ」は三十六の歌碑をあらわす。

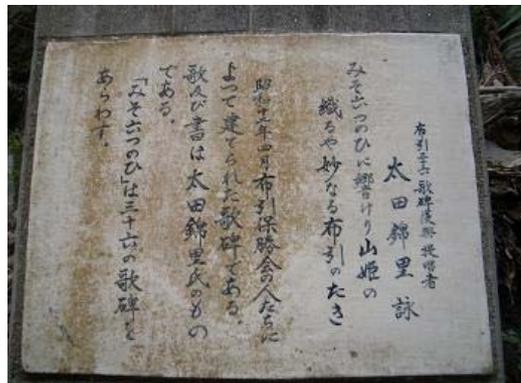
【全体写真】



【碑面】



【説明板】



句碑

涼しきや嶋へかたふく夕日かけ

布引坊

【解説板】

この歌碑について、坂井華溪の「攝西兵庫俳諧史」では次のように説明している。

熊内の人布引坊栄滝のもので天明寛政頃に建てられたのであろうと思われる。夏の太陽が淡路島の方へ傾いて老松から落ちくる風の涼しさを詠んだもので、天明期の面影が充分である。

【全体写真】



【碑面】



【説明板】

